



畫圖百卷鳥一



狩野探幽筆

石中子寫



畫圖百卷鳥

東都御書房

松栢堂



百花為序

東都御書房

至者何若身大長也花鳥空
山百也夫祝餽進穀徐丹揮
甲宗森何梨之松栢之云龍
嘉地是鵬鸞鴉鸚鵡
以非尼田之其羽誰得鳥

柳花鳥百可以寒子為篇
 在子花鳥為之柳其况得
 枕河而餘錄是觀則
 非特為之百花不為
 可區悉屯鳥民列中受又
 生去展玩如佳花而每

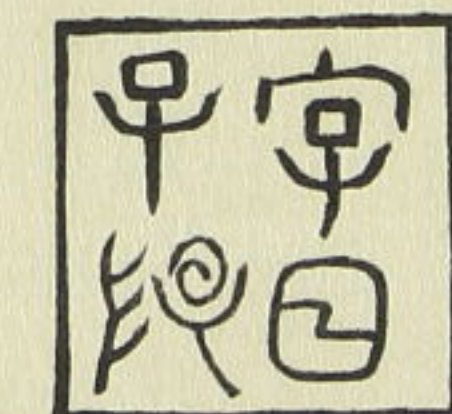
在後志華一語者之風ヲ
 者早烟去歷雪去橫
 去向陽者為而細去翁
 去嘯者悲去相去枯者
 抗去搏者睡志爭枝者
 雙標者列細去每如此

乃者其有所憾無咎之嘆
 以始可無較都於以操
 自是雖於一七亦悅自入後
 蘇友依繁平魯健之
 有者定謂之性情然如史
 素而末身縮則附丹

鉛之方苟已意後素技
 厚付之恒之化之神則
 百為可誤子可也
 是通編者之宜邪石
 中子画索也其距梓可也
 者因兩廟雪笑曰序於余

於是年三月廿五日
享保茂申秋月雨夜

東者龍洲李德鳴鳳誌



百萃鳥圖

孟隣全狩野探雪守完門人

野之鬢髮山下石仲子守範鳥

勸時雌星花

蜃氣樓輝山 校

高橋 範明

小早川 豐次

附言

一大東言盡者不可勝算矣中世有狩

野祐勢永仙二子特啓厥迪而遂為

狩楚氏之箕裘。乃其妙至探幽以成。
一家。凡仙佛山川人物花卉。淡墨傳
彩。皆能兼之。以獨步于海內。至今世
之鳴畫。無不沿其流者。矣。故寸縮尺
楮。散落人寰者。戶收家藏。可不謂卓
犖不偶者乎。

一百萃鳥舊本。出探幽手筆。而為魁本
帖子。獨為豪家。見占斷石仲子嘗學。

狩野氏者。有年。遂歸其本。為小冊子。
附。剗。厠。氏。公。之。干。世。

一丹鉛之有方。專門家所秘。今已洩機。
恐獲蠶大方。亦惠後進好事者。

一艸木之真偽。禽鳥之區別。古人其猶
病焉。非畫家所識。悉隨舊本。更俟博
洽之人。

一刻將就梓。遂加贊辭於其上。聊做萃

人之類其丹青家務專干業。彘媚詞
賦者豈以分淄澠為故。歌詩炙輶隨
得錄之云。

灞雪道人岩蹇驢記

法印探幽之旨。以筆端畫
天下之形。上者王公大人
より士曲處工高。市に如う
わら。金粧もむせり。うの
あつ。きら。も。さ。ら。や。ま。り。か。い。一。茶
水。こ。ろ。な。へ。よ。る。静。ま。あ。そ。ふ
こ。ろ。に。能。備。の。句。こ。ろ。こ。ろ。へ

物にありあるを清く
 其粒あるを裁あはれ
 狂う乃忘なしくさわうち
 さしらよ秋の如く
 夢さしらよ鳥はあはれ
 あはれあはれあはれ
 弦さるる舞さるるのむくむく

花をよめよよ
 花をよめよよ
 花をよめよよ
 花をよめよよ

花をよめよよ
 花をよめよよ

紫野居士の致函



畫圖百花鳥總目

卷之一

桐鳳凰	一	葵孔雀	二
磐梨就鳥	三	朴木鶻鷹	四
石荷鶻	五	松董鶴	六
竹萬年青鶻鶻	七	萱草遊鶻	八
野菊白鳥	九	玉蜀黍雁	十
水蓼白雁	十一	仙翁蒼鸞	十二

百種鳥卷一

六

長春吐綬雞 十三

茶藤錦雞 十五

華髮曼きんみの鳥 十七

木凡山雉 十九

卷之二

川原桔梗蒼鷺 廿一

澤瀉鴨 廿三

小蓮華鷓鴣 廿五

千日紅鷄似錦雞 十四

梨子精衛 十六

躑躅白鷗 十八

菱鷓 二十

勢井草野雁 廿二

石斛鷓鴣 廿四

苦蕒龜鳥 廿六

菊雉子 廿七

水葵水札 廿九

洋蓬草鷓鴣 卅一

金盞花雞 卅三

志伊加刀鴨 卅五

鳶尾鳩 卅七

金絲桃鵲斑鷓 卅九

茶樹四十雀 四十一

蓮鷺 廿八

白苜鴛鴦 三十

南京梅南京鳩 卅二

南燭鸚鵡 卅四

剪春羅千鳥 卅六

鼠麴艸鷗 卅八

梅鷓 四十

福壽草と地鳥 四十二

瞿麥風鳥

四十三

檀特鶉

四十四

杏子鵠

四十五

紫菀鶉

四十六

桺三光

四十七

荒世伊登宇
き祢もみ

四十八

紅毒鳩

四十九

虎杖あぎぢ

五十

卷之三

李紅雀

五十一

山茶花鶯

五十二

秋海棠鷓鴣

五十三

糸櫻練雀

五十四

罌子粟鷓鴣

五十五

鼓子花鷓鴣

五十六

蒲公英雲雀

五十七

黃蜀葵雀

五十八

櫻秦吉了

五十九

豆藤小陵鳥

六十

芍藥畫眉鳥

六十一

覆盆子翡翠

六十二

白木蓮華桑鷹

六十三

牡丹菊戴

六十四

茱萸頂小鳩

六十五

石榴八頭

六十六

葛鶉

六十七

乞くつりき文鳥

六十八

水仙鵲

六十九

石竹比翼鳥

七十

桔梗黑鶉

七十一

丁子草尾長

七十二

卷之四

郊苍杜鵑	七十三	雞冠鳴	七十四
連翹翠雀	七十五	風蘭啄木鳥	七十六
沙羅雙樹碧鳥	七十七	牽牛苍忍あごの	七十八
百合深山頰白	七十九	仙臺萩鳥	八十
芝蘭鶉	八十一	椿青鳩	八十二
海棠黄鳥	八十三	萩鶉	八十四
さんしほみ木鷲	八十五	木槿きんざう	八十六

桃音呼	八十七	鷹爪山雀	八十八
柏繡眼兒	八十九	木芙蓉鶉	九十
刈萱白雲雀	九十一	柿花山鵲	九十二
木綿唯紅鳥	九十三	藤燕	九十四
笑靨櫻桑鳥	九十五	蘭駒鳥	九十六
風車川原鶉	九十七	菅くぐり	九十八
辛夷木兎	九十九	枇杷鶉	百

卷之五

日光山慈悲心鳥

總羅漢寺 阿蘭陀繪

高野山佛法僧鳥

花鳥寫 左右

附錄

誹諧

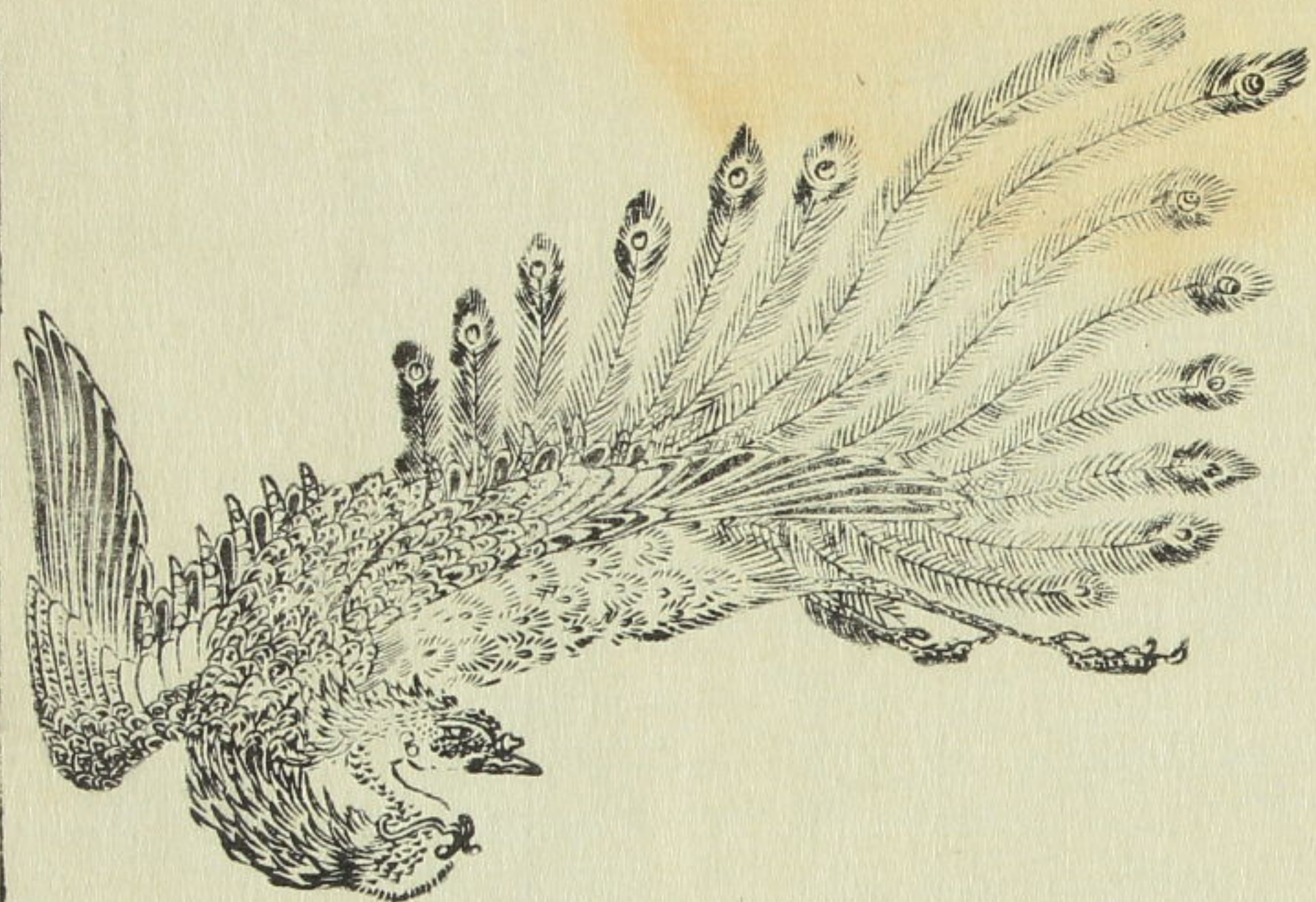
歌仙 四卷

百韻 二卷

百花鳥總目終

鳥のれや相よそくみへの代の鳥

露路沾子



第一

桐

葉も地草の汁よりなる小綿青うも
くさけけを飾うさねり地草の具
わりを飾うはとこんぞも後細か
さくふはの桐木の具とくろくも
是るまき苔ひやろくまの汁入らうご
うんぞやとけくろく

鳳凰

鳳 雄也 凰 雌也
天ニ在テハ朱雀

鳳凰 鳳 雄也 凰 雌也
天ニ在テハ朱雀
鳳凰 鳳 雄也 凰 雌也
天ニ在テハ朱雀
鳳凰 鳳 雄也 凰 雌也
天ニ在テハ朱雀

第二

菱

滑葉

葉も地草の汁よりなる小綿青うも
びやろくまはけろくまはけろくまはけ
つむきたは白綿青の汁にてはまべりた
る年の具を飾うはとこんぞも後細か
さくふはの桐木の具とくろくも
是るまき苔ひやろくまの汁入らうご
うんぞやとけくろく

孔雀

孔雀 越鳥

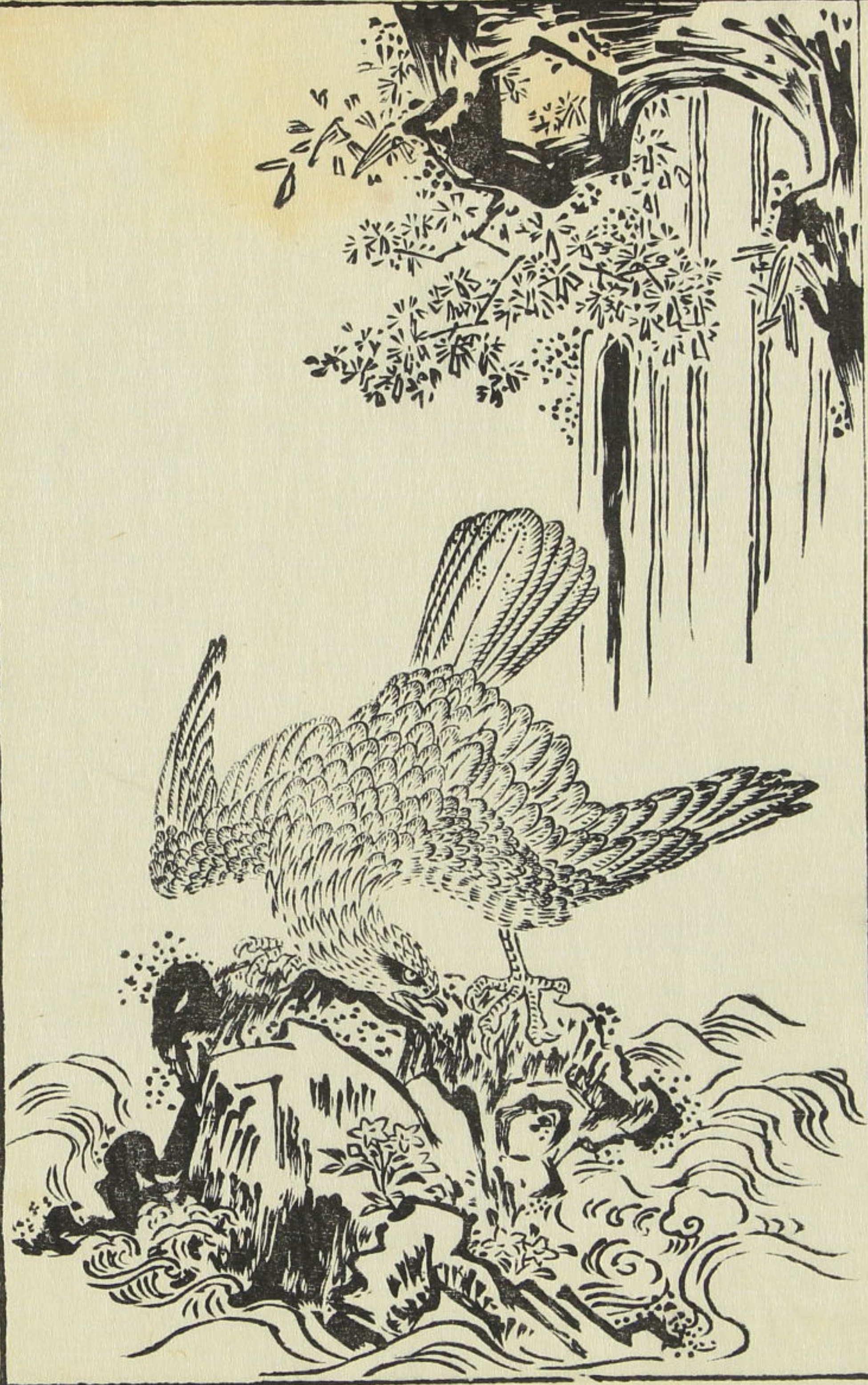
孔雀 越鳥
孔雀 越鳥
孔雀 越鳥
孔雀 越鳥
孔雀 越鳥

いんげんりゆの尾とらふひ 岑水



いそぎも鶴の禱や入りい

長江亭 沾風



第三

鶯梨

葉綿き付立まのけあまをたあや
の具付けまのあやなはは日くま
朱どみ

鶯 鶇 鶇 鶇

目の内こころん入とさるさるけ
とみふあをさるさる白保か
びやわくわりこころんてさ
そとさるさるけ爪とみふさ
うんて
全祥ゆはまり地こころんて
さるさる毛うさるさる尾羽
ありむこころんて保り地とさ
めいろうけこころんてさるさ
とらいつれも相終てま入を

第四

朴木

葉ト地まのけより濃いろ
まのけりてあつとさるさる
くま合まうとけあやどみ
たあやの具とさるさるは花
よりこころんけ地祥白保は
本の胸とさるさるあいろ
合まうとらひさるさる

鶴鷹 大鷹

目の内保れさるさる保
保わりこころんわりとさる
大格さるさる保しとさる
まのどく保さるさる保わり
こころんけ毛さるさる保わり
さるさる

鷹人のむらゝや卯月系

舎人



大門、鷲、目配、
西月、石、あ、の、こ、紅

園香
水

第五

石荷

白豆全 虎耳草トモ
葉の汁付を煮下すすけあすの
具を煮去る其れを花あすの具

又けきう共

鶏

月の四六の同ト是れ日ト無様若
どもくは法とみして病者のけり服
ごうんま毛をこふん太くあす月ト
あすのけり上りてあすのけり合
まごうのこふん合若実の合

第六

松

榕 案

葉を他を煮くは葉の汁をけり上り
かんじて煮去るかす葉をいんか
るより一胴けり上りの具を煮く
太く和ね彩色目茶和とり

董

葉小葉青付を花紅白二色に
トも他あすの具上りあすのけり
けりけりいをいり白りこふん

鶴

丹頂

月の四六の同ト是れ日ト無様若
どもくは法とみして病者のけり服
ごうんま毛をこふん太くあす月ト
あすのけり上りてあすのけり合
まごうのこふん合若実の合



兄弟も若毛をわい 鶴り周
月松も花系をわい 松り周

水光

松の汁は清くはるかな

吉田

曼美



第七

竹 一名石母草 此君 吾友

葉結青葉の汁は白糸書枝緑青
書入り葉うきまれ汁なり

萬年青

葉結青葉の汁は白糸書枝緑青
して仕立

鶴鵠

目朱どみうらわさだごらん入頬肉色
朱の液多下はて突こ背中うもびえ
くまよこあいろうけ尾ごらんわりごらん
毛虫版墨の具ごらんは足葉土の具
合まごどぼては朱どみうら

第八

萱草

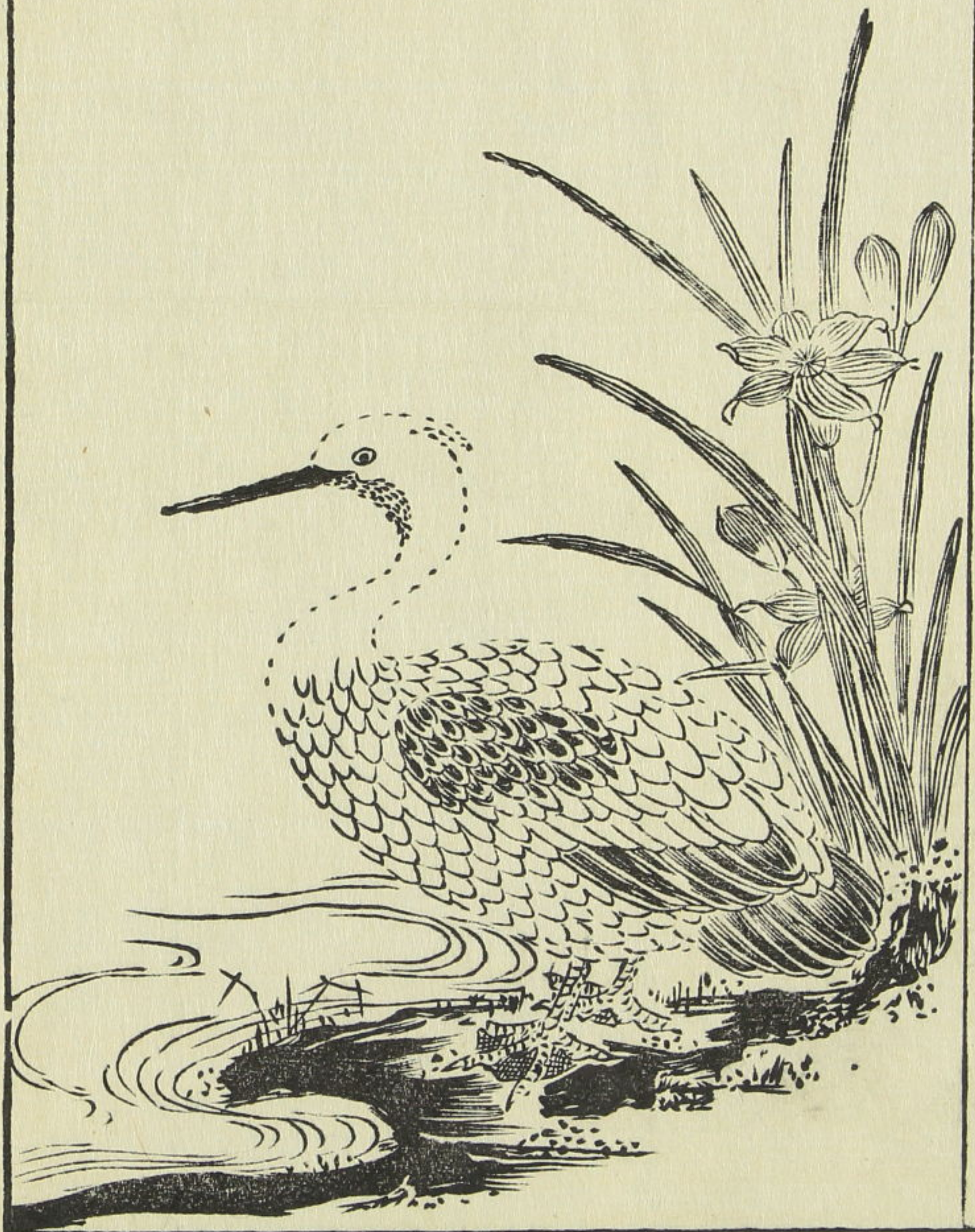
葉二ごん結青葉の汁は白糸書枝緑青
の汁花の他ちまうわりあんどま
白糸書圖のさ

遊鴉 鴻

目の色もまら南豆白糸書枝緑青の汁は
白くつり葉のさよりこ分一きごみあり
合葉土うべり足は合まごどぼては
くまよこあいろうけ尾ごらんわりごらん
ごらんすすわうて上少はごらんはては
ごらん風切羽尾ごらんは足葉土の具
合まごどぼては朱どみうら
眼のいよ朱どみうらて府を突こまごどぼ
ては

雨收萱竹色
日抱野禽聲

白主



白鳥の池を渡るの景

席文

第九

野菊

葉ニ白く縁青付立葉のけしと葉を
花とあざだまぎのけしとあざと葉
まごうてつきちりけ
とつき被合とまごうてつきちりけ
葉とまごうてつきちりけ

白鳥

月の内朱とみ目のけしと鳥のけしと
合とまごうてつきちりけ
とつき被合とまごうてつきちりけ
葉とまごうてつきちりけ

第十

玉蜀黍

葉と白縁とまごうてつきちりけ
花とあざだまぎのけしとあざと葉
まごうてつきちりけ
とつき被合とまごうてつきちりけ
葉とまごうてつきちりけ

雁

葉と白縁とまごうてつきちりけ
花とあざだまぎのけしとあざと葉
まごうてつきちりけ
とつき被合とまごうてつきちりけ
葉とまごうてつきちりけ



カシコウノケル子ニニ
カスミカレノモカ

方十星を懐くと記やと丁のおろ
い川と柜おも十寸植わや

驚度人
沾入

夢うり藤武う作と誌と夜

注意



十一

水蓼

紅草 遊龍 天蓼

花名下の具付之草多々下実ごん
りて一掃くれまりの草はくべ
葉こじん緑青付立葉のけり
くは飾りさへ差白綿を付
より多々にて競をのみぞ

白鷹

目の内をさう嘴は肉色なり上ニ朱
のきりしてくはりやを多々く
身白しうとごんりり少
くは毛ごんごんりり少
具より多々毛去はる

十二

仙翁花

剪秋羅

花名下の具付之草多々下実ごん
りて一掃くれまりの草はくべ
葉こじん緑青付立葉のけり
くは飾りさへ差白綿を付
より多々にて競をのみぞ

鸞

目の内をさう嘴は肉色なり上ニ朱
のきりしてくはりやを多々く
身白しうとごんりり少
くは毛ごんごんりり少
具より多々毛去はる

露の月夕の仙鳥也

露人



長きよりの鶴やの思ひ

露月



十三

月季花

長春

李叶金盞花異名トアリ

葉小綿毛をわたりよりうはちふくこと若きもの
けして花を平具わたりを平うはち花の背
より花をこふんとくはちうへつちをこふん
ト名少はく仕まべ

吐綾雞

目の内赤くみ家襟ひびけ中筋を白く
けこふんは也取類赤くもくはちうすく
くふ背中よりどの具わたりとせとけ
の如く羽あり赤くみ入上り金泥とくか
風物おとの具をうま尾白綿の具す
くまは上り若のけはちをうま
ぬわりの合すましとわりの背をうま
かこも虫金泥を入ぬ合をせまも虫を
こふんを入は白綿若のけはちひのひん
わりあつとけり若のけはちひのひん
名わりの上赤くもはけ鳥の色が肉を喰
といふ則は赤くもを喰とま

十四

千日紅

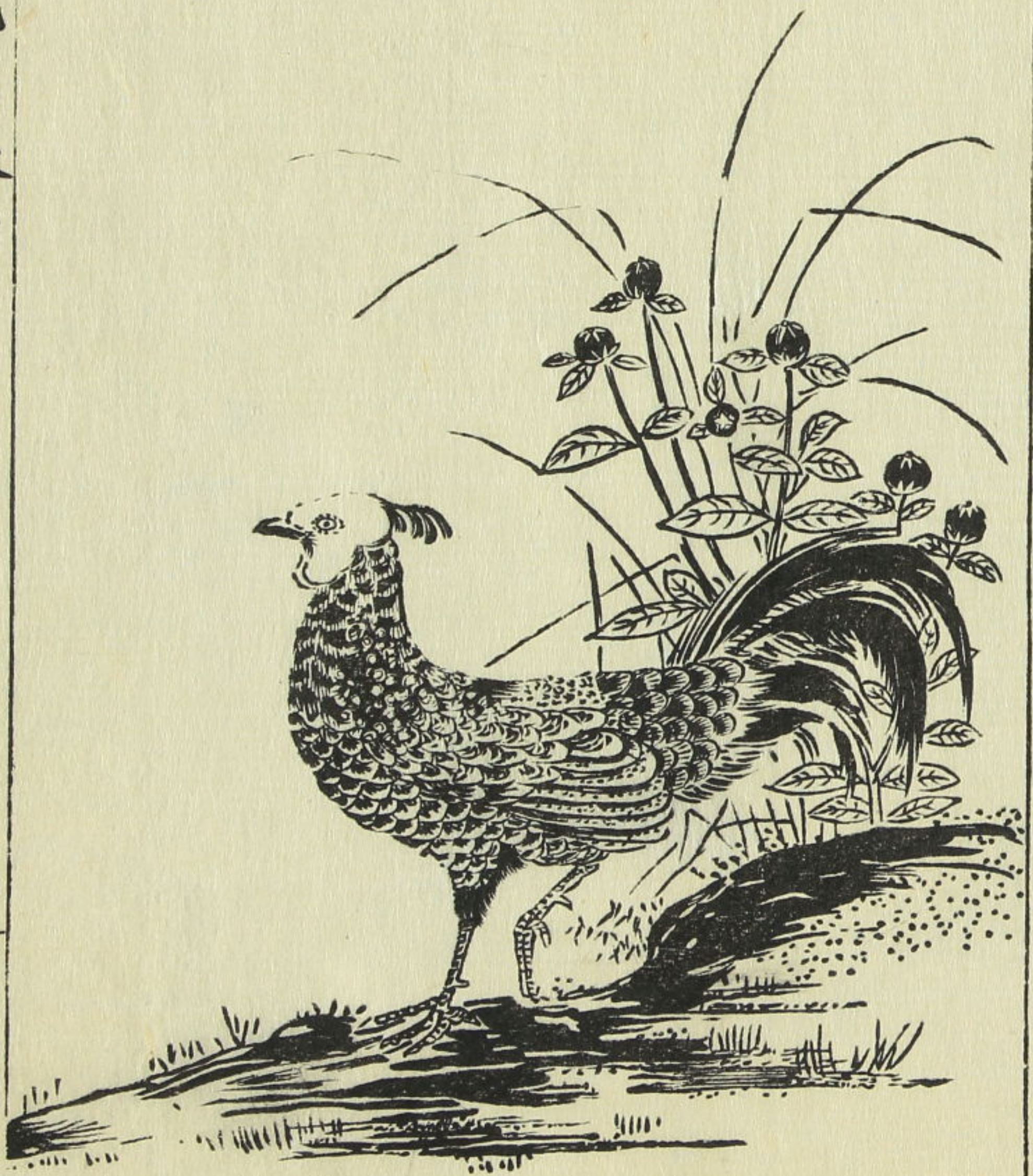
葉小綿毛付立まりうはちふくこと若きもの
けして葉白綿若のけはちをこふん
より花をこふんとくはちうへつちをこふん
若のけはちをこふん

錦雞

目の内赤くみ背筋肉色多うはち筋肉
色より赤くもはけ背筋肉の具わたりとせ
くはちの毛をうまにせとせとせと
の背中に背あり金泥とくはち
羽のけはちひのひんをうま
又白くも府ありけこふんを用かべ尾
金祥雞ト目トはちをこふん

とけむや鶴はるるる

日光
雪溪



井出やうの錦鶏宿は川の中

自嘯



十五

茶藤

棟棠 醜藤

葉小細きところへ多敷く茶の汁を
白藤葉の汁を白くくりにて茶を
して茶白藤をくくりにては茶

錦鶏

目の内赤きところをくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を

十六

梨花

葉二ん細き茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を

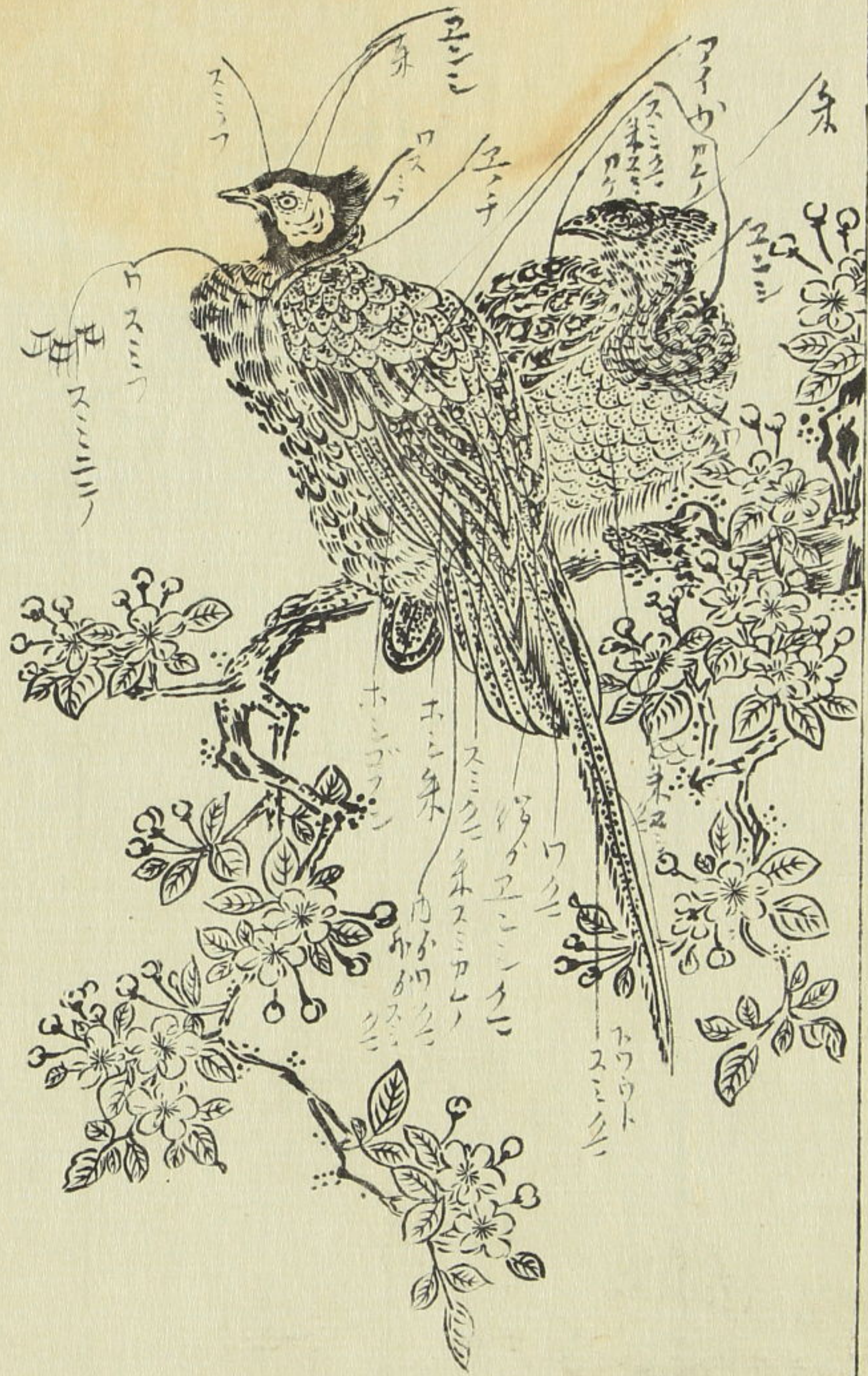
精衛

葉二ん細き茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を
くくりにて茶をくくりにて茶を

1011

清一艶 一 株、雪 春一鬼 巳化、禽
長、街、枝、葉、去、 滄一海 孝一思 深

森如尹



細う平流か咲義名やもふ家

乙九

十七

華鬘

此鳥の冠は花をさかすかす
花多下の具付をせし多下は鳥乃色
いろんも多下は鳥乃色をさかすかす
事小は色をさかすかす
くまふも上は鳥乃色をさかすかす

きんみの鳥

此鳥は日月をさかすかす
くまふも上は鳥乃色をさかすかす
事小は色をさかすかす
くまふも上は鳥乃色をさかすかす

十八

躑躅

黄杜鵑 紅白の鳥
は肉をわり来りて仕立を多下は鳥乃色
は肉をわり来りて仕立を多下は鳥乃色
は肉をわり来りて仕立を多下は鳥乃色

白鵪

同の白鳥をさかすかす
くまふも上は鳥乃色をさかすかす
事小は色をさかすかす
くまふも上は鳥乃色をさかすかす



白鵪やけりし鳥をさかすかす

山紗

引涼亭 子石

引涼亭 子石



十九

木瓜 檀子 木桃 木李

花肉色上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
はまべしとてべしといふは其の具也
白濁してより葉小偏をきつ竹節を

山雉

目の四朱を黒而赤し朱を後よりけり
入嘴は上より一但し其の具也
全身を黒く上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
ちをくぐり赤色を後よりけり
上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
あしを黒くしてはまべし

二十

菱 菱 水栗 沙角

花肉色上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
はまべしとてべしといふは其の具也
白濁してより葉小偏をきつ竹節を

雀 俗ニ鴻ヲ用ハ非也 鶉

目の四朱を黒而赤し朱を後よりけり
入嘴は上より一但し其の具也
全身を黒く上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
ちをくぐり赤色を後よりけり
上ニ朱をくぐり赤色を後よりけり
あしを黒くしてはまべし

善哉此より在り鶴の深きに 貞磨

